【小特集　書院生の見た日中戦争】

1941 年夏、崑山
――清郷工作開始前後――

愛知大学教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センター長　**三好　章**

はじめに

本稿は、昨年度の『同文書院記念報』Vol. 28 に掲載した「亀井壯介報告から見た蘇州・常熟の清郷――「清郷」地区に関する報告（1943）」に続くものである。1941 年夏の「大旅行」であるから、昨年の亀井報告よりも 2 年前と言うことになる。時期的には、日中戦争は全面化し、日本軍の行動とともに各地に成立していた対日協力政権が統合され、汪兆銘による南京「還都」が実現し、統治地区の確保、治安維持が日程に上っていた。また、日米間の矛盾も次第に解消不可能点に迫りつつあり、「日米交渉」が暗礁に乗り上げていることは誰が見ても明らかであった。日中戦争全面化からすでに 4 年が経過し、日米交渉が行き詰まりを見せる中、日本国内では次第に対英米戦をあおりたてるような言説がかまびすしくなってきた頃である。一方、南京「還都」後の汪兆銘政権は、自らの党を「純正国民党」とし、青天白日満地紅旗に「和平反共建国」の 6 文字を記した三角の布をつけ、重慶政権との違いを示していた。そして、日本軍の軍事力を背景にしているとはいえ、自らの政権としての安定性と安全を確保したい汪政権としては、連合国との戦争など沙汰の限りでしかなかった。事実、日本による対英米戦の開始に遅れて、1943 年 1 月のこととなる(1)。

こうした時代環境において、遠方への「卒業大旅行」が不可能となった東亜同文書院生は、いうまでもなく日本軍あるいは対日協力政権統治下の中国において「大旅行」を行い、その調査報告を提出するしかなかったのである。しかし、これまで比較的等閑視されていたこの時期の書院生による調査報告は、学生という熟度を求めるには酷な水準でありながらも、職業研究者、調査マンとは違った視点を呈示してもいる。

ここで取り扱う 1941 年第 9 班久保田太郎報告「江蘇省崑山の県政に就いて」(2)は汪兆銘政権下の崑山県の県政に関するものであり、調査は 1941 年 6 月から 7 月、ちょうど第 1 期清郷工作が開始される時期に行われた(3)ところに、歴史的事件の目撃者として意味を持つ。1941 年夏は、上述した様に汪兆銘政権南京政府が、独自の政権としての正統性を確保しようとしていた時期であり、日本軍にとってもその地域の治安確保は不可欠であった。崑山という、大都市上海に隣接する地域へ久保田（以下、「久保田」と略記）らが「調査」に訪れた時、米国の宣教師も医療を手立てに伝道活動しており、同様に医療伝道を行う日本のキリスト教会

関係者もいた。そして、その存在はいずれも決して小さなものではなかったのである。言いかえれば、「宣撫工作」[4]によって中国民衆の人心掌握を進めようとしていた日本軍関係者にとって「目障り」な人々が確実に存在していたということになる。

ところで、日本本土の雑誌や新聞が自由に手に入り、書院生が出入りできた上海租界では、国際的な対立を深めつつもそれなりの交渉や情報の入手が各国間で行われており、従って英米人の動きも目にすることができた[5]。こうしたことは、学内における一定の言論の自由を謳歌していた書院生にとって、日本軍の行動や対日協力政権の実態などを批判的に観察できる可能性が許容されていたといえよう。本稿でも、20代前半の未熟ではあるものの、久保田なりに足を地に着けた考察を試みる姿を示すことが出来た。

本稿執筆に当たり、崑山とその周辺地域に関しては史料状況が比較的良好であることも指摘しておかねばならないだろう。まず、崑山そのものについては、維新政府期の1938年に刊行が開始された地方紙『新崑山日報』があり[6]、また清郷工作については蘇州で刊行された『清郷日報』が参照できる。さらに、近隣地域である無錫では『新錫日報』、汪政権江蘇省政府所在地蘇州では『蘇州新報』が発行されており、かなり完全な形で閲覧することが可能である。特に『新崑山日報』に関しては、観察者久保田も報告書中で言及しており、久保田自身の情報源であったことも確認できる。

なお、清郷工作に関してはここでは詳細な説明は行わないが、対日協力政権安定のために日本軍が現地協力政権軍とともに実行した敵対勢力排除、治安回復および維持作戦であり、教育や生産活動の恢復など民生の安定が必須条件として組み合わされていた。そして、1941年7月に実施された第1期清郷はかなりの成果を上げ、共産党系の新四軍およびその別働隊である江南抗日義勇軍も、さらに国民党戴笠系のゲリラ組織忠義救国軍も、少なくとも日本軍・汪政権軍の圧力を受けて活動不能に陥ったのである[7]。

1．久保田の旅程

久保田の旅行日記から、その旅程をたどってみよう。崑山地域に関しては「旅程」と言うほどの距離ではない。全体に必要事項だけを事務的かつメモ的に記してゆく久保田であっても、それなりの感慨を持って『日誌』を書き始めている。

> 午前7時、諸先生始め在学生一同の歓送裡に校門を出発せり。林出学生監米倉学生主事の両先生の御見送を受け、午前10時上海北站を出発、愈大旅行の途に就けり[8]

6月6日金曜日、午前7時に当時徐家匯海格路にあった東亜同文書院大学[9]の校門を出た久保田等は、午前10時20分発、華中鉄道海南線無錫行きの普通列車に乗車に乗車した[10]。

当時、華中鉄道海南線、すなわち上海－南京間の最重要幹線は、一日12往復[11]。後掲の第1表に示したように、当時の新聞各紙には時刻表が掲載されていた。華中鉄道ではオンタイムでの列車運行を公言していたわけであり、この地の治安が、少なくと

第1表　華中鉄道海南線時刻表

（三十年五月一日新訂）火車時間表（日本時間）

	種別	南京	鎭江	丹陽	常州	無錫	蘇州	崑山	上海
上行 海南線	（普客）3等						6.30	7.38	8.58
	（混）3.4等				6.35	7.58	9.30	11.06	13.10
	（普客）2.3等	7.45	9.26	10.44	12.40	13.38	14.38	15.28	17.05
	（急客）123等	8.30	9.42	10.13	11.01	11.42	12.28	13.04	13.55
	（天馬）123等	10.00	11.10	——	12.25	13.04	13.49	——	15.10
	（普客）3等					14.40	15.40	16.46	18.08
	（普客）3等						16.48	17.56	19.25
	（普客）2.3等	11.45	13.40	14.25	15.39	16.40	18.05	18.55	20.20
	（急客）123等	15.20	16.33	17.03	17.51	18.47	19.33	20.09	21.00
	（混）3.4等	16.00	19.12	20.40	22.00				
	（飛龍）123等	17.00	18.10	——	19.26	20.04	20.49	——	22.10
	（混）3.4等	17.20	20.29						

	別種	上海	崑山	蘇州	無錫	常州	丹陽	鎭江	南京
下行 海南線	（混）3.4等							6.30	9.26
	（混）3.4等					7.10	8.43	10.24	13.17
	（急客）123等	8.00	8.53	9.34	10.16	11.00	12.00	12.35	13.40
	（普客）2.3等	8.35	10.30	11.25	12.33	13.45	14.57	15.55	17.42
	（天馬）123等	9.30	——	10.57	11.40	12.23	——	13.37	14.40
	（普客）3等	10.20	11.38	12.30	13.30				
	（普客）3等	11.00	12.31	13.39					
	（普客）2.3等	11.55	13.37	14.39	15.37	16.38	17.49	18.53	20.27
	（混）3.4等	13.40	16.40	18.21	20.08	21.22			
	（急客）123等	15.20	16.12	16.54	17.36	18.23	19.20	19.55	21.00
	（飛龍）123等	16.40	——	18.07	18.48	19.31	——	20.45	21.50
	（普客）3等	19.30	20.54	21.46					

も鉄道沿線地域においては、後述する「鉄道愛護村」活動など、地域住民を巻き込んだ形でよって、かなりの程度確保されていたことを示している。

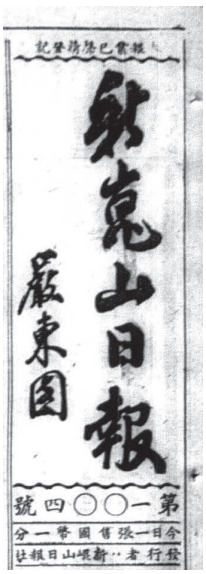
11時38分、崑山に到着した久保田等は駅長高垣氏の歓迎を受け、駅舎内で話し合いをし、その後、日本軍支那派遣軍第13軍崑山駐屯部隊連絡官事務所へ赴いた。この後も、各所に置いて軍特務機関部隊[12]を訪問し、概略の情報を得ることから、「卒業大旅行」は本格的に始まった。崑山では同文書院ＯＢの三上修吾が連絡官として赴任しており、まずは同所に「厄介になること」になった。先輩から、いろいろと情報を得、調査方法、範囲などのアドバイスを受けたのである。

同日午後、崑山での調査の計画を立てた。この時、「基督教青年会崑山分会」の主持桝井久馬[13]氏を訪ね、意見を聴いている。桝井は、後述するが、崑山において医療伝道を行っていた人物であり、日本軍の宣撫工作とも一定の関与がうかがわれる。また、同様の医療を手立てとした伝道事業をバプテスト派のアメリカ人宣教師も行っており、崑山ではかなり興味深い状況が展開していたと言える。

翌7日土曜日、調査を開始した久保田は、午前中に軍連絡官事務所に赴き、おそらくは書院先輩三上の手配の下、県政一般に関する資料を踏査し、午後、「崑山日語学校」を訪問、校長冨田氏に会い、その後授業参観および高級班学生との座談会を行っている。連絡官事務所が土曜午前中の業務であり、日本語学校であれば、学生にとって絶好の実習の場となるため、久保田等を歓迎したのであろう。もちろん、実習の場とするためには意思疎通が必要であるから、一定以上の日本語能力のある高級班が選抜されたとするのが妥当である。

8日は日曜日であったが、久保田等は蘇州に置かれた支那派遣軍特務機関へ出向いた。書院ＯＢの佐藤連絡官が同道し、蘇州とその近辺の一般情勢を「拝聴」した後、午後は蘇州観光、夜に崑山に戻るとある。上掲の列車時刻表を見ても当時の普通列車で1時間弱、急行ならば40分ほどというごく近隣にある両地は、簡単に往復できる場所にあり、人と物とが活発に行き来していたのである。

9日からの1週間が、崑山での実際の調査期間であった[14]。以下、久保田が訪れ、調査した地点、出会った人物などを列挙する。まず9日午前には崑山県政府を訪問し、県長厳東園に面会した。厳東園は、維新政府成立期から崑山県長に就任しており[15]、久保田が目にしたであろう『崑山日報』の題字を揮毫している



（前頁図参照）。午後は、週末同様、書院先輩の三上から崑山の状況について話を聴いた。

10　日、午前中は具体的な予定がなかったのか市内の市場を見学したりして時間を使い、午後には模範小学校と省立農学校を見学した。教育に関連する事項は久保田の報告の中でも重点が置かれており、データも収集している。

11　日、県政府に赴いて県政全般の資料を踏査し、午後は日本軍崑山警備隊で通訳業務を行った。書院生は漢語に堪能なことから従軍通訳に動員されており、まだ現役の学生であった久保田も、実習を兼ねた業務であったと推察される。そして、「序でに隊長の意見を聴けり」とあり、清郷工作を前にした崑山の状況を聴取したのであろう。

12　日、午前は「引き続いて調査をな」したが、場所は不明。午後、教育局および「党立民衆学校」を訪問し、教育事情を調査したとある。なお、「党立民衆学校」の詳細は不明である。

13　日、午前中に崑山合作社を訪問し、主任乾氏に会い、午後は民衆教育館を見学している。『新崑山日報』には「県立民衆教育館」の記事があり[16]、社会教育機関として設置されていたこと、崑山住民への宣伝活動の拠点の一つであったことが理解される。『維新教育概要』には、民衆教育の中心機関として「毎県少クトモ一ケ所ヲ設置スベキコト」とある[17]。その後、地方法院、看守所すなわち拘置所を見学している。

14 日、午前は「引き続き調査」。午後に県立中学校の授業を参観した。土曜午後であり、特別時間割であったのかも知れない。

15 日は休養日であったのか、馬鞍山とも呼ばれ、崑山の地名の由来ともなった山に登り「風景良しに絶佳」と感嘆、午後に「調査完了」とある。これは収集した資料の整理に当たったものと考えられる。

翌 16 日、午前 8 時 30 分、先輩三上の見送りを受けて崑山を発ち、10 時 30 分頃無錫着[18]。車にて蘇州特務機関無錫支部へ出向き、支部長上田春榮の意見を拝聴し、午後は華中蚕糸鼎昌工場を見学、支店長高槻が同道して工場内外を写真に収め、さらに蚕の取引状況、工場の経営状態などを「調査」した。

17 日、無錫の施政、産業について概括的な調査を行い、翌 18 日には午前 8 時[19]、無錫から南京に向かい、鷄鳴寺にあった中支建設資料整備事務所に、やはり書院先輩藤谷釈男[20]を訪れた。戦時の中、書院生の活動場所も次第にきな臭くなっていく様子がわかる。その後、南京から長江を船で蕪湖、安慶、九江、漢口と移動し、6 月 23 日、漢口で独ソ開戦の報に接した。

> 6 月 23 日　晴　独蘇開戦の報を聞き、感慨無量なり。漢口市内を見学す。ママ（漢口神社に参拝、中山公園見物）ママ[21]

日中戦争全面化でも国際都市としての性格を失わなかった上海に学んだ書院生の多くが、久保田の様に国際関係の展開に対して思うところがあったものと考えられる。九江でも軍のトラックに便乗したり特務機関を訪問するなど、かけ足ではあるがこの地域の主だった産業拠点を廻っている。そして、7 月 10 日、南京から列車で上海に戻った[22]。

2. 久保田の調査報告……「江蘇省崑山の県政に就いて」

久保田太郎の卒業大旅行報告は崑山の県政全般に関するものであり、先にも述べた様に、清郷工作直前のこの地域の状況を、かなり詳しく知ることが出来る。なお、『報告書』の全般的内容を理解するため、目次を以下に示す[23]。崑山県政の概要である。

第 1 章　崑山縣の区域と文化程度
第 2 章　県政府諸機関構成者及著名県政治家の特性と党部との関係
第 3 章　日本現地機関と県政府との関係
第 4 章　崑山県政指導機関の活動状況
第 5 章　崑山県政府の施政
　第 1 節　総説、第 2 節　地政、第 3 節　保衛、第 4 節　財政、第 5 節　教育、第 6 節　経済建設、第 7 節　衛生、第 8 節　社会事業
第 6 章　県司法の活動状況
第 7 節　結論

2-1. 崑山県の概況と久保田による調査の関心

久保田が『報告書』に示す「第 2 表：総人口・戸」によれば、全人口 24 万 3000 余、日中戦争全面化以前が 27 万人弱というから[24]、一時的減少を経て治安が回復しつつあるなか、上海などからの流入も考えられるが、もとの住民も戻りつつある段階であったと考えられる。

全人口の中で日本人は 29 戸、男 65 人女 30 人の合計 95 人。中国人が絶対多数をしめていることは当然であるが、ここには当然軍関係の数字は示されていない。なお、第

第 2 表：総人口・戸数

国籍別	戸数	男	女	人口総数
中国人	56,231	123,538	119,532	243,070
日本人	29	65	30	95
米国人	1	1		1
合計	56,261	123,604	119,562	243,166

2 表中の「米国人」は後述する医療伝道のためのバプテスト派教会関係者である。日米交渉が継続している国際関係の反映とも言えよう。

当時の華中は、中国の他の地域同様、上海など一部大都市の中心部を少しでも離れれば、たとえ近郊であってもそこは農村地帯であった。ましてや、上海・蘇州という大都市に挟まれた崑山では、『報告書』においては、治安強化のための「物資搬出入取締強化」が行われ、それゆえ、商工業は著しく不振であったと記す。工業も、煉瓦・製油、石灰製造程度であり、それに従事する人々も、全体から見れば少数である[25]。

「第 3 表：職業別構成表」からは、かなり異様な状況が示される。農業・水産業部門では女子は男子の半数ほどの人口であるのに対し、それ以外はほぼ全てが男子人口なのである。就業者として考えればそれなりに合点が行くものではあるが、圧倒的に男子が数字としてとらえられている。

崑山地域の当時の農業事情について、主要作物は米、小麦、菜種であり、平均年産額として米 130 万石、小麦 35 万石、菜種 4 万石、と久保田は指摘する[26]。しかし、「石」に何等の注記もなく、日本の尺貫法における「石（「こく」≒60 kg」なのか、中国の旧制である容積単位なのか、判然としない。天野元之助は『中国農業の地域的展開』の

第 3 表：職業別構成表

職業	戸数	男子数	女子数	人口総数
農業	45,538	91,276	45,562	138,838
水産業	1,500	2,453	1,213	3,666
商業	2,580	4,128		4,128
工業（木匠）	557	835		835
（水匠）	445	668		668
（小工）	835	1,002		1,002
（石灰）	12	122		122
（煉瓦）	4	80		80
交通運輸業	233	695		695
公務	668	801		801
自由業	322	288	134	532
其他	2,979	3,295		3,295
合計	55,672	105,770		152,679

なかで、この地域については「一年二毛作が保証される」(27)と述べる。清末民国初期の農業経済に関しては膨大な研究もあり、一所の土地の耕作権が土地所有権と切りはなされて売買あるいは賃貸されるという「一田両主」の存在も、1950 年代の研究(28)でもすでによく知られている。

天野の同書における中心的記述は、「1936 年 9 月から 42 年 4 月までの約 7 カ年間、満鉄上海事務所にあって、戦火の熄むや治安維持会をたずねまわり、平静化するや……農村・工場・商業・民船等の調査をやった」(29)ことによる。地域は、「江南デルタ地帯」であった。これは、久保田等書院生の「卒業大旅行」での崑山行きと時期的には重なる。もちろん、片やプロの調査マン、片や学生という経験と力量に於いては比較すべきもないが、最初にも言及した様に、彼らの新鮮なまなざしに映った上海近郊農村の姿を検討することも、それなりに価値のあることではないだろうか。

久保田の見た崑山地区では、農業は基本産業であると言いつつさほどの叙述量を『報告書』中に占めているわけではない。それでも、「事変」以後、すなわち 1937 年 8 月以降の日本軍通過によって生じた事態の深刻さは把握しており、民国政府が運営していた「農事試験所」が破壊されたこと、それが 1939 年 5 月、維新政府治下の「県籌措経費」によって復活したことが指摘される(30)。その農事試験所が農民に作付けを指導するのは米、小麦に加えて、大都市近郊の特性を生かした野菜、各種花卉類である。しかし、「荒地空閑地利用」については 1913 年に清丈局が置かれ、開墾が奨励されたもののそれにとどまり、「事変」後の 1941 年 4 月に汪政権江蘇省令によって墾殖委員会が置かれて開墾が奨励されても、「目下、調整立案中」であり、「元来荒地面積は大なるにも拘らず、その十分の六は窪地堤防湿地墓地等で墾殖に不適当」なること、桑田や養蚕も奨励されながら、「現在まで復興に至らず」と観察の結果を述べるしかなかった。清郷工作開始直前という久保田の調査が行われた時期の問題と、久保田自身の関心もあり、本来基幹産業として最も重要であり、治安維持のためにも最重要な農業よりも、教育と治安に興味が向いていたのである。ちなみに、農業を含む経済全般に関して、久保田の寄せている興味は薄く、全体で 400 字詰め原稿用紙 50 枚ほどの『報告書』中、「第 6 節　経済建設」には 3 枚半が充てられているに過ぎない。

2-2. 清郷工作への関心

久保田等が崑山に調査に向かう 1941 年 6 月初旬、南京では第 1 回全国宣伝会議が開

かれていた[31]。当然、上海の邦字紙『大陸新報』を始め、調査対象地での発行である『蘇州新報』『新錫日報』、さらに近隣の『新錫日報』なども目にしているはずである。この宣伝会議の目的は、「剷除共産思想」「中日和平万歳」「汪主席万歳」「中華民国万歳」など掲げられたスローガンからもあきらかなように、出来上がったばかりの汪政権を如何に盛り立てるかにあり、そのための政治宣伝を汪政権統治地区で全面的に展開することの政治宣言でもあった。宣伝関係幹部が集合した範囲としての「全国」も、実質的には江蘇・浙江など汪政権が日本軍の軍事力によって維持している範囲に限定される。これはとりもなおさず、久保田らが「調査」し得る「大旅行」の圏内とも一致する。

ここでは、久保田の見た崑山県について、清郷工作に拘わる部分を取り上げて検討してみたい。『報告書』には「第 3 章　日本現地機関と県政府との関係」との章立てがある[32]。実質 400 字程度の分量ではあるが、そこに日本軍崑山部隊連絡官が駐在し、占領後には宣撫班が組織されたが、1941 年夏現在は上海特務機関の傘下にあるとの記述がある。周知の様に、日本軍の機構のうち「特務機関」は非軍事部門の活動全般を担当する部局であり、1937 年南京陥落、汪政権「還都」を経て、そうした系統に入ったものである。汪政権成立後は「内政干渉を回避」するために「法制上」これを切り離し、「部隊連絡官」と改称した、とある。そして、「県政府の施政については部隊連絡官が、指導監督に当たってゐる」訳であるから、占領地区統治を特務機関が担っていたことを示している。事実、『新崑山日報』は「軍特務部崑山班発行許可」の文字をその題字に掲載している。

さて、日本軍が崑山を占領したのは 1937 年 11 月 12 日[33]、直ちに宣撫班が活動を開始したものの、そのころは「主要郷鎮にて相当激戦」が展開された。治安が回復したのは翌年 7 月以降で、王佑之を県知事に知事公署が設置された後となる[34]。これは、「皇軍の徹底的討伐粛正並各機関の宣伝宣撫等各種工作と相俟ち、県政の運用亦宜しきを得たる結果」であったという。丁度、梁鴻志を首班とする中華民国維新政府が成立していた頃であり、その威令は南京の一部にしか及ばなかったと評される程度に過ぎなかった。従って、日本軍の軍事力抜きに、崑山県知事が業務を行うことはまず不可能であったといえる。その後、1940 年 9 月、県知事公署は県政府と改称され、県知事に代わる県長に厳東園が就任するに至った[35]。ここ崑山は汪政権の首都南京に近いために政府の威令が「行はれ易く」、農業県であって「事情」が複雑でないために「思想的背景も少ない」が、県境地区では「敗残兵、敵匪出没」状況があるために清郷工作が開始される、と説明される。そして、清郷工作には「警備隊・武装警察[36]主力」が集中して当たるため、新政府の活動を支援するには討伐に加えて「民衆の組織化」「自衛団結成」「宣伝宣撫工作」の展開が必要となる、というのである。

それらの宣伝活動について、久保田はその組織概略を示している[37]。それによれば、基本的に県政府の業務として宣伝活動を行い、崑山に「第五地区宣伝委員会」を置く。県長が委員長を兼任し、汪政権軍第五地区警備隊長及び日本軍部隊連絡官が指導に当

崑山反共憂國同盟會第一次徵文啓事

本會爲宣揚和平反共建國文化起見舉行首次徴文其徴文條例如下：一、題目：由作者自擬，以反共和平建國爲主旨　二、體裁：論著或文藝不拘　三、字數：不得超過三千字　四、酬金：稿件由本會評定後分甲乙丙三等，甲等十元乙等五元丙等三元　五、截稿日期：六月十五日　六、收稿處：柴王弄本會新嘉山日報社

本周部自六月一日起發給團員身份證至希各團員於六月一日起至七日止來團領取隨身携帶以資識別此啓

たる。実際の活動は宣伝班を各郷区公所などに置くとある[38]。興味深いこととして、官制民衆組織として「反共憂国同盟会」なるものが組織されている。『新崑山日報』民国30年6月6日号第1面下部に広告が掲載されており、同会が「和平反共建国文化を宣揚」することを目的としていることが記されている。そのために、賞金付きの論文・文芸文などを募集するというのである。久保田の報告によれば、同会は「対敵宣伝」に重点を置き、毎月「伝単」2万枚を撒布し、情報収集・「不逞分子」逮捕を行っていた。合法的な逮捕権を持つかどうかは不明であり、実際の人員や治安維持活動での実態はともかく、その一翼を担うことになっていたことは疑いない。その他、「流動劇団」という巡回劇団が「反共和平活動」を強調し、「中日親善」と「鉄路愛護宣伝」[39]を行っていたが、第1次清郷が開始された1941年7月に解消された[40]。そして、第一期清郷工作が開始されると汪政権を支える「純正」国民党崑山県支部が行政と一心同体で宣伝活動に当たったという。

そうした治安確保のための清郷工作では、当然ながらそこに住む人々を如何に掌握するか、が重要な課題となって現れる。久保田もこの点は理解している。しかしながら、中国社会の基本知識としての「保甲」について、「必ずしも支那特有のものでない」、日本の「五人組」に類似した組織、との認識[41]にとどまっている。もちろん、書院の教育に於いては根岸佶以来の中国社会論があったのであるが、個別の学生に関しては各人の理解の深化に待つしかない。とはいえ、「法規的にもより良く整備し、その実際上許容されてゐる活動範囲が広範且強大であり、……半官権的である……社会上のみならず文化上に於ても重要な制度……。自治の運用……軍警察の補助機関」と「保甲制度」について叙述しており、文献的考察が不足してはいるものの、一応の理解はできている。それとは別に、久保田が記録した崑山県の保甲統計に関しては、下に第4表を掲げる。

第4表　崑山県城郷保甲戸口統計一覧表

区別	保数	甲数	戸数	人口総数
第1区	66	695	7,536	32,678
第2区	51	550	5,921	26,807
第3区	59	622	6,636	31,575
第4区	47	520	5,539	26,710
第5区	38	400	4,369	17,697
第6区	90	971	10,424	45,876
第7区	46	478	5,184	22,079
第8区	93	1,004	10,087	39,224
計	430	5,240	55,672	242,655
事変前	514	5,561	58,846	269,390

第4表を見ると、最初に上げた「第2表：総人口・戸数」とは若干異なる数字が入っているが、理由は定かではない。また、各項目を合算しても人口総数に合わない。速

断は出来ないが、久保田が元にした資料の出所、調査時期自体に相違があるか、当初の資料そのものに問題があるのかも知れない。もっとも、ある傾向を示すデータとしてみれば、「事変」前の数字に戻りつつある、としたい意図はくみ取れよう。一般的な保甲制度の場合、おおよそ 10 戸で 1 甲、10 甲で 1 保となるのであるから、統計の数字の上からはまずまずの状況ということが出来る。そして、この「保甲」に基づき、清郷工作開始後は村民を動員し、各郷に自衛団を設置し、「一致団結、愛郷心による模範村建設」をめざし、そうした努力がなされない場合は然らざるものであり「非協力団として保甲連座によって処罰」(42)することになっている。

2-3．教育への関心

久保田は、『報告書』第 5 章第 5 節に「教育」をとりあげている。維新政府の段階でも、人心掌握と治安回復のためには教育活動の安定的再開が先決であるとして、当初から取り組んでいた課題である。筆者もこの問題に関して、中国人教員の日本見学旅行について取り上げたことがあった(43)。そこでも、対日協力の問題とは別に、現場教員の教育への熱意などが明白に見て取れた。久保田が見たのはすでに汪政権成立後、筆者が検討した時期を疾うに過ぎている。しかし、崑山においては「復旧は甚だ遅々たるもの」(44)であり、初等教育に限ってみても、「事変」前の学校数で 3 分の 1、児童数で 2 分の 1 程度に過ぎなかった(45)。

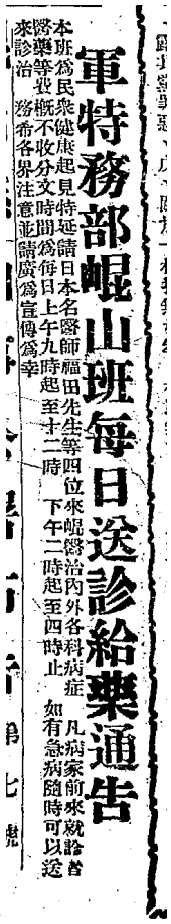
問題は、教育に携わる教員問題である。久保田は「教職員の思想状況行動状況」の項目の中で、教員の大部分が事変前に抗日教育を受けて成長し、教壇で抗日教育に従事していた者が、「事変によつて急転回」して「表面は忠実に其の職を守りつつあるが、其の思想と行動とは必ずしも一致してゐるとは考へられず」とせずにはいられない。従って、「環境の如何に依っては旧思想を謳歌するに至るとはいかなくても、日本を誤つた角度から見る場合が起こらないとは限らない」と危惧の念を表明する(46)。この問題の根柢には「俸給問題」と物価高があり、急速な解決が必要であるものの、現状ではストライキまでは起きていない。それは「日本に対して危険思想を懐くものと見做されることを恐れるが為のみ」(47)であるとする。もちろん、教員ストなどが起これば大事件であろうが、対日協力政権の背後にある日本帝国主義、という図式が見えてくる。かなり遠回しな表現ではあるが、『報告書』が東京に送られること、また書院内部の教員がすべてリベルというわけでもないであろうことなどは、容易に想像がつく。よって、教員の在職訓練ないしは再教育、根本的には新規教員の養成採用が求められるわけである。しかし、事変前にあった師範学校は「未恢復」であり、現職教員の再教育訓練の機関も機会もないという(48)。しかしながら、すでに維新政府時期の 1939 年 1 月に教員養成機関の嚆矢として南京に教育部直轄臨時教員養成所が設置され、開所式が挙行されているのである(49)。この間の経過は現在の所未詳であるが、順調に進まなかったことだけは確かである。

また、教材に関しては新政権、即ち汪政権教育部編纂の新国定教科書であっても「解釈如何によつては抗日教育に使用し得る」と久保田は指摘し(50)、維新政府以来 3

年にわたって続けられてきた「親日教科書」編纂が、体裁は整ったとしてもその中味となると問題をはらんでいたことを示している。もっとも、教室において教員が児童生徒に対する時、教科書「を」教えることが教育という営為であるとの理解があるが、実際にはその時その時、相手によって教員は相手に対するのであり、教科書の文面が執筆者や編纂者の意図に従って受け手に届くと考えることの方が、現実離れしている。その意味から考えると、久保田の指摘は、教材と教育という視点に一般化できる方向性を持つと同時に、特殊1941年夏という時期に限ってみれば、清郷工作が一定程度順調に進むにせよ、長期的展望を持つには現地中国民衆との間に信頼関係を構築するという、さらなる努力が求められることを意味している。

2-4．衛生状況への関心

日本人の近代中国観を示す言葉として、草森紳一の著書名『文字の大陸　汚穢の都』[51]を上げることが出来る。久保田も「衛生思想は未だ普及の域に達してゐない」、主要郷鎮には漢方医が多数開業してはいるものの、利用するのは「主に中流以上の家庭」であることを指摘する[52]。すでに触れたように、日本軍の「宣撫工作」のうち効果を上げたものとして医療活動があるが、これについても皮膚病・眼病・マラリヤなどの主要疾病について、「巡回施療の際、相当の患者が見受けられる」[53]とする。『新崑山日報』にも、「軍特務部崑山班毎日送診給薬通告」という広告記事が掲載されており[54]、そこには日本人医師が4人、各科診療、急患随時とある。軍特務部の積極的な姿勢が伺われる。


軍特務部崑山班毎日送診給薬通告
本班爲民衆健康起見特延請日本名醫師福田先生等四位來崑醫治內外各科病症
醫藥等費概不收分文時間爲每日上午九時起至十二時下午二時起至四時止
凡病家前來就診者來診治務希各界注意並請廣爲宣傳爲幸
如有急病隨時可以送

崑山地区の衛生施設としては県立病院と個人経営の病院が1か所ずつあるものの、診療費がかかるため一般住民はこれにかかることなど出来ず、久保田の分類に依れば「施療院」が多くを担っている[55]。具体的には、日本人基督教会崑山分館主持桝井久馬が「看護婦1名を伴ひ、自ら施療に従事、時々各地を循環施療」していること）、また華中鉄道巡回施療班が随時派遣されており、さらにアメリカ人宣教師ジョンソンが経営する浸礼会派診療所がアメリカの赤十字社より経費、薬品を支給され、職員6名の体制で一日あたり3、40名の患者の診療に当たっていた。ジョンソンの診療所は事変後に開所されたもので、当初は無料で施療にあたっていたが最近実費を徴収する様になったという。有償化された理由には言及されていないが、日米関係の悪化の影響も充分に想定できる。なお、キリスト教関係者の社会事業として、中日孤児院があげられている[56]。これは会衆派教会である中日組合教会の附属事業であり、1940年2月に在米日本人の経済的援助によって事業を開始し、職員8名が月あたり経費約500元で運営し、生後8か月～16歳まで17人の孤児の世話をしていた[57]。上海は帝国主義諸国による疎開が設定された地域であるため、当然ながらキリスト教伝道が活発に行われており、書院生も徐家匯のカ

トリック教会を目にしながら学窓での生活を送っていたのであり、教員の中にも坂本義孝などのようにＹＭＣＡに出入りするものもあった[58]。久保田自身がそうした環境とどういう関係を取り結んでいたのか定かではないが、多少なりとも知識と影響を受けていたことは確実であろう。

3．久保田の「結論」

保田は、崑山県調査を経て「具体的な改善意見」として以下の6点をあげている[59]。対日協力政権が以下に安定的に存続するか、が目的である。それによれば、第1に「自治保衛の実を挙げ、以て敵陣営の活動を完封」するための自衛組織の強化、第2に「時代に逆行するが如き課税は極力之を避けなければ、却つて民心の離反に至る理の当然」であるから田賦の引上げは「今後」のこととし、公安費警務費は「寧ろ国家に負担せしめ」るべきこと、第3に従来の「支那独自の自由観念と徹底せる金銭観念」は目前の利害に眩惑されることに結果しており、「衣食足りての教育、金儲に資する為の教育」という教育観によって、子弟の教育自体が「動ともすれば等閑に附せられ」てきたことが根本的な問題であり、当面の課題としての教員問題も「殊に事変前の抗日教育をなした当事者によつて教育の局に当たらせ」ることに原因がある以上、「早急に再教育機関を設置することを要する」とする。そして第4には農業面での技術と多角経営など経営の改善、「陽城湖[60]や各河川」にて魚類蟹類を養殖するなどを指摘する。第5に交通運輸通信の公企業化は不可能であるが、農機具の導入や農民への財政支援は可能とする。日本の様な公営交通、国営鉄道との比較が念頭にあるのかも知れないが、具体策を提示しているとは言えない。そして第6として、物資統制の問題をあげる。物資統制の円滑が「民心把握工作上非情に重大」な意味を持つからであり、それがうまくいかない場合には「無知な民衆をして敵側に走らせしめる恐れ」があるからである。

> 数千年来自由経済思想に耽溺し來たつた支那民衆は、経済の統制に関する認識なく、徒らに束縛されるが如き觀念を懐く者少からず、従て作戦資源以外の日用必需品は、統制の精神に鑑み、巧みに敵地への流入を抑制しつゝ、占領地区内に欠乏せざるやうに考究すべきである。可能ならば一定物資に限り敵地への流入を許し、その対償として有利な作戦物資を吸収するが如き積極的な方策がとられるべきであると思ふ。

現在から見ると、中国と中国社会、そして中国民衆に対する見方としてはかなり問題を含んでいることは事実である。しかし、現在それを追及はすまい。これは、当時の書院における中国社会にかんする研究教育が学生に如何に表現されるかの一つの見本ではある。上にも述べたが、「文字の大陸」として畏敬の念を以て対して来た中国の、実社会、日常生活の一面は「汚穢の都」であったのである。そこに住む人々も、当時の日本の農民とさほど違いはなかったはずである。

4．結びに代えて

久保田は、崑山での1週間の調査と蘇州・

南京での見聞を経て、九江や武漢など長江流域を旅行し、上海に戻った。夏期休暇に入っている時期ではあるが、このあと日本の戻ったのかどうかはわからない。幾度か触れたが、もっと遠方に旅立ちたかったのかも知れないが、次第に日米戦争が叫ばれつつあったこの時期、独ソ戦開始に感慨を持ったにしても、その内心は知る由もない。

書院の一般学生の一例として久保田の報告を扱ってみた。結論などはやはり平板であろう。それでも、ひとりで『日誌』と『報告書』を執筆し、提出したことは、自身にとって学窓を巣立つ前のイニシエーションとして、生涯の意味を持ったのではないだろうか。久保田が卒業した頃はまだ戦況も悪化しておらず、出征したところで死に直面するという緊張感は薄かったかも知れない。これは、この後の書院生との大きな違いであろう。

---

(1)汪政権の第二次世界大戦への参戦問題に関しては、本稿の検討の範囲を越える。別稿を用意したい。

(2)久保田太郎「江蘇省崑山県の県政について」（国家図書館編『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』2016 年 8 月、第 181 巻）。以下、引用に際して『報告書』と略記する。

(3)昨年の愛知大学東亜同文書院第学記念センター編『記念報 Vol.28』掲載の論考「亀井壯介報告から見た蘇州・常熟の清郷――「清郷」地区に関する報告（1943）――」でも言及したことであるが、1942 年、1943 年の卒業旅行報告集には、清郷工作に言及しているものが 10 本以上あった。日中戦争が全面化する中、書院生の卒業旅行の行く先が日本軍による治安の維持が可能であった地域に限られたのは当然である。これは、中華民国政府と日本国政府との間にそれなりの両会があった時期であっても、書院生の「卒業大旅行」は現地政府あるいは治安維持力の庇護下でなければ行われえなかったのであり、日中戦争全面化以後は、彼らの庇護者として日本軍しかなかったのであるから。しかし、それ以前の書院生の関心としてできるだけ遠方に、と言う若者特有の意識があったことは確実であり、この点は先学藤田佳久らによって十分に評価されてきた。しかしながら、1938 年以降は書院の目と鼻の先である上海-南京間の農村社会や、同様に対日協力政権が成立していた「蒙疆政権」統治下などに目を向けたのである。それは書院生にとっては大きな方向転換であったことに変わりはないが、自らが生活する上海とその周辺に目を向け、じっくりと考察するきっかけとなったのではないだろうか。本稿で取り上げた亀井壯介も、報告の最後に本文中にも指摘したが、学業を切り上げ戦地に赴かざるを得ない気持ちを、昂揚しているように記している。表面の勇み立つ気分とは裏腹に、内面へ屈折した思索が錯綜しているように思えた。

(4)宣撫工作における重要な人心掌握の手段として、地域住民への医療があった（広中一成『華中特務工作　秘蔵写真帖　陸軍曹長 梶野渡の日中戦争』彩流社、2011 年 11 月）。筆者も、梶野氏のヒアリングに同席し、貴重な話を伺った。その中に、

安徽省滁縣での梶野の体験談として、新四軍根拠地住民まで日本軍の治療を受けに来訪したこと、特に皮膚病・眼病が多かったことなどがあった。罹患する病気の種類などからは、19 世紀末に中国に渡った荒尾精が「目薬」販売を梃子にしたことを彷彿とさせる。衛生状態などからは、荒尾の半世紀後の上海近郊であっても、大同小異であったことが容易に想像される。

(5)20 世紀メディア研究所編『Intelligence「東アジアのメディアとプロパガンダ」』第 4 号、2004 年など。いわゆる諜報活動を除いても、外字紙のほか、華字紙、邦字紙が各種発行され、さらにコクガイカの新聞雑誌などの流入もあり、情報は入り乱れていたといってよい。

(6)中華全国図書館文献縮微中心『新崑山日報』、北京図書館、マイクロフィルム収録は1939年2月10日～1941年9月28日。若干の欠号はあるものの、この間の記事に関しては本文中に一部引用し、またその部分を示したように、判読はかなり可能である。

(7)清郷委工作全般および 1941 年 7 月の第一期清郷工作に関しては、拙著『『清郷日報』記事目録』中国書店、2005 年 3 月参照。そこでは、崑山を含む第 1 期清郷区域の治安回復状況にも言及し、活動不能に陥った新四軍が「民衆にかくまわれる」という江南抗日義勇軍にまつわる「沙家浜」の故事の背景が理解される。

(8)『昭和 16 年度大旅行日誌　第 9 班　久保田太郎日誌』（前掲『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』第 64 巻）1 頁。以下、引用に際して『日誌』と略記。ページ数は、久保田の『日誌』に付された数字。

(9)いうまでもなく、疎開後の「交通大学」校舎を「借用」している。隣接する徐家匯虹橋路校舎が戦火で焼失した後、「維新政府」から合法的に借り受けた形になる。

(10)久保田に限らず、当時の書院生の報告日誌には、列車などの時刻は大まかにしか記されていない。そこまで厳密に要求されなかったと考えられる。日誌は、あくまでも、書院生による「卒業大旅行」が実際に行われたことを示すためのものであり、厳密な行程表は不要であったと考えられる。なお、本文中に示した「火車時間表」には「日本時間」と記されている。その理由に関しては、現在の所詳らかにしないが、当時の省線鉄道関係者が華中鉄道に多く関与していたこと、つまり、日本による実質的な直接管理が行われていた可能性があり、その場合、日本本土との整合性がとられていた可能性も否定できない。この問題は、別途考察する必要がある。久保田等が乗車した列車の時刻に関しては、上記の理由から 10 時 20 分発無錫行き普通列車と判断した。学生による廉価な旅行である事を考えれば、優等列車を利用することは考えにくいからでもある。なお、上掲の『新錫日報』民国 30 年 5 月 11 日第 1 面には無錫電報局・電話局の「通告」として、5 月 11 日より華中電気通信股份有限公司では、日本時間を使用するとあり、リアルタイムで日本と交渉する電信電話が、日本内地から管理されている実態が見える。

(11)現在は北京－上海を結び京滬線の一部に当たる滬寧線では、複々線化された中国版新幹線である「高鉄」がピーク時には一日90往復以上という数量とは比較にならないものの、かなり安定した運行状況であったといえよう。

(12)「特務機関」はシベリア出兵時に始まり、「統帥範囲外の軍事外交と情報収集」が任務とされた（秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会、1991年10月、374頁）。本稿に関連する華中地域は「中支特務機関」と呼ばれ、「国民政府の南京遷都時から、南京に駐在武官を置き、……支那事変後、占領地区の拡大とともに、各地に特務機関が設置された。昭和14年支那派遣軍編成当時には、南京、安慶、上海、蘇州、杭州、漢口等に置かれていた。……昭和18年北支と同じように特務機関は連絡部と改称された」（同前書、376頁）。ただし、「陸軍平時編制では、官衙・学校・軍隊以外の陸軍の機関を特務機関と称し、元帥府・軍事参議院・侍従武官府・東宮武官・皇族王公族付武官・外国駐在員・留学生などを指す」（同前書723頁）とある。

(13)桝井久馬について、詳細は不明である。会衆派基督教会の人物であることが久保田の県政報告の中で言及されている。なお、同姓同名の人物は、戦後には日本基督教協議会視聴覚事業部演劇委員会編『キリスト教劇集』日本基督教協議会分所事業部、1955年（国会図書館蔵）などに見受けられる。なおその他、カストリ雑誌にも桝井の名が散見されるが、同一人かどうか確認は取れていない。

(14)久保田の場合、崑山での「調査」が一週間、旅行全体でも1か月程度であるから、初期、中期の書院生に比べれば「大旅行」とは言いがたいかもしれない。それでも、先に示した様な「感慨」は先輩たちへの憧憬とともにあったであろうことは、注記しておきたい。

(15)維新政府教育部顧問室『維新教育概要』昭和15年3月、48～49頁。民衆教育館は日中戦争前より存在し、その設置目的は「成人ニシテ失学スルモノヽタメ」とされ、維新政府成立後には「教育部ニ於テハ特ニ戦後社会教育実施弁法を定メ、中日親善、和平実現ノ民衆啓蒙運動ヲ実施シ、更ニ民衆教育館暫行規定以下ノ諸法規ヲ定ム」とある。そして、「将来各省市県小学校ヲ利用シ、文盲撲滅ノタメニ民衆学校ヲ増設スル予定ナリ」と、その将来を語っている。実現の有無はともかく、識字と宣撫、宣伝工作、さらに軍事活動が呼応しなければ後述する清郷工作は表面的な成果さえ収め得ないのである。なお『維新教育概要』凡例ページに同書刊行の目的として「昭和13年3月28日維新政府教育部成立以来、昭和15年3月中央政府成立直前ニ至ル教育部ノ業務経過並ニ教育部顧問室ノ工作大要ヲ略述」したものとある。顧問室主席顧問には漢口同文書院で活動し、東亜同文会とも関わりの深い斉藤重保が就いている（同書73～74頁）。筆者は愛知大学霞山文庫蔵の同書を閲覧した。霞山文庫蔵の同書は、斉藤自身が「東亜同文会図書室恵存」として寄贈したものである（同書、表紙見返し）。

(16)「崑山県立民衆教育館啓事」『新崑山日報』民国30年6月1日第一面広告。ここでは、6月に2回目の「嬰孩健康比賽」つまり「赤ちゃんコンクール」を開催するとある。健康優良児を表彰する行事は、戦後日本でも昭和30年代前半までしばしば開催された。どれ程の親子が参加したのか不明であるが、母子衛生への関心を公言できることは、政権の安定性が一定程度以上確保されていることの裏返しであったとも言えよう。

(17)前掲『維新教育概要』48頁。

(18)これも、前掲の様にその時刻発着の列車はない。本文中に掲げた華中鉄道海南線時刻表から判断すると、8時58分崑山発、10時16分無錫着の急行列車であろう。

(19)ここでも、時刻はおおよそであろう。時刻表には午前8時台の列車はない。

(20)入学・卒業期数など不明。なお、読み方は「ときお」であろう。

(21)『日誌』7頁。

(22)最終日の日誌は「午前10時20分南京出発　午後3時半上海帰着」とだけある。大部の『報告書』執筆のため、『日誌』は書き出しに比べて最終部分には感想を記す余裕がなくなったのか、簡潔になったのかも知れない。

(23)『報告書』2〜3頁。

(24)『報告書』3頁。

(25)『新崑山日報』民30年4月29日1面に広告「崑山磚瓦石灰業現款交易啓事」の広告がある。同様の広告は毎日の様に出ているが、煉瓦・石灰業以外の「産業組合」はほとんど見当たらない。

(26)『報告書』5頁。

(27)天野元之助『中国農業の地域的展開』龍渓書舎、1979年8月、290頁。天野の『中国農業の地域的展開』は、自身の戦前期中国における調査と分析、多くの中国および欧米研究者との交流の中で生まれた書物であり、中国農業史および中国農業研究のエッセンスと言ってよい。天野がこの地域を訪れたのは1929年10月の上海を起点とした武漢三鎮、長沙行きを嚆矢として、1937年5月に列車による上海・北京・漢口・長沙・九江・南昌・杭州行き、そして文革直前の1966年暮の三回である。なお、天野はここで、上海近郊農村の輪作形態に関して天野著『中国農業史研究』（御茶の水書房、1962年、413頁）およびBuck, J. L., *Land Utilization in China*, Shanghai, Commercial Press, 1937, “Statistics”, p. 253.の関連する事項の掲載されたものとしてあげている。具体的には「表作は水稲連作、ときには棉花をはさむが、裏作は小麦を2〜3年つくると、蚕豆に代えて地力の回復をはかる」とする（同前書、290〜291頁）。

(28)貝塚茂樹他編『アジア歴史事典』平凡社、1959年など。『アジア歴史事典』では、大項目として叙述されている。

(29)同前書、289頁。

(30)『報告書』70〜71頁。「籌措経費」の詳細は不明。「調達経費」くらいの意味か？

(31)『新崑山日報』民国30年6月2日第1面「第1届全国宣伝会議　大会於今日掲幕　集全国宣伝幹部於一堂　提案共達236件」とある。『蘇州新報』民国30年6月1日、第1面には、「中央社南京31日電」として「首届全国宣伝会議　今晨在京掲

幕　各地出席者 145 人　収到提案 236 件」とある。『新錫日報』民国 30 年 6 月 1 日、第 1 面では「首届全国宣伝会議　今日挙行掲幕典禮　各地宣伝幹部人員紛紛赴京参加 上午恭謁国父陵墓正式虚構開幕」。『蘇州日報』は「中央社 5 月 31 日電」、『新錫日報』は同じく「中央社 6 月 1 日電」を記事発信元としている。それぞれの新聞の詳細に関してはまだ未詳の部分が多いが、いずれも日刊紙であるものの、汪政権治下の中央紙と地方紙とでは発行時刻が異なっていることをうかがわせる。近現代史では、かなり重要なポイントとなる。なお、当時の上海における邦字紙『大陸新報』では、宣伝会議最終日の昭和 16 年 6 月 4 日第 1 面に「和平実現へ邁進！　国府宣伝会議　汪主席の訓示」と題する記事が、翌 5 日第 1 面には「敵宣伝の誤謬衝く　国府宣伝会議　岩崎報道部長講演」と題する支那派遣軍宣伝部長岩崎中佐に関する記事が写真付きで掲載されている。また、この記事には日本の駐中国特命全権公使日高信六郎も列席して「日華親善と宣伝の重要性」を訴えている。さらに、同紙 6 月 1 日第 2 面には「宣伝会議を録音　中華映画技師ら南京へ」とのべた記事がある。日本にとっても重要な意味を持ち、従って多方面からの支援協力が大々的に行われていたことを示している。

(32)『報告書』13～15 頁。

(33)『報告書』第 5 章　崑山県政府の施政　17 頁。以下、崑山県の統治状況に関しては、『報告書』17～20 頁。

(34)王佑之は維新政府成立後、民国 27 年 5 月 26 日に県長の委任を受け、7 月 5 日に就任している。この間 1 か月以上の時間が空いており、江蘇省内他県県長の場合よりも長い（行政院宣伝局編発行『維新政府之現況　成立一周年紀念』民国 28 年 8 月、152 頁。なお、本書は上海木村印刷所印刷となっており、本文は日本文、一部漢語。上梓は民国 28 年 3 月 28 日と奥付にあり、発行まで 5 か月もかかるとは、一般的には理解しにくい）。

(35)『新崑山日報』民国 29 年 9 月 3 日第 2 面、「県府大礼堂中　新県長厳東園氏　前日挙行就職典礼　当日接印視事出示佈告　各機関来賓観礼者甚衆」。同記事に依れば、新県長厳東園は上海出身 46 歳、上海民立中学卒業、辛亥革命後中華民国学生軍に参加、さらに陸軍入隊、保定軍官学校第 2 期歩兵科卒。雲南などで軍務につき、民国 11 年退役、その後、法律業務に関与、弁護士開業、上海事変後「上海北市人民維持会」を組織、新中国政治経済研究会に参加している。現地の混乱の中で、それを安定化させようとするために、日本軍との協力の道を選択したもののひとりと言えよう。

(36)武装警察隊は警察署と独立した組織として 1939 年 2 月に成立し、崑山武装警察大隊のもとに 2 個中隊、236 名が置かれている。中隊は各 3 個小隊が所属する。大隊長は県長が兼任し、治安維持、田賦徴集援助が主たる任務となるが、「皇軍の作戦にも協力し、至大なる効果」をあげた、とする。そのうち、第 1 中隊は以前の自衛団を改組したものであり、第 2 中隊は帰順匪を改編したもので、いずれも日本

軍の部隊連絡官及び警備隊が訓練を担当する（『報告書』35 頁）。

(37)『報告書』25～28 頁。「第 5 章　第 2 節　地政 4．宣伝機関及びその活動状況」。

(38)なお、『報告書』25～28 頁によれば、「県政府宣伝委員会」を「宣伝股」に改組し、主席委員以下委員 8 名で構成され、各種「伝単」を作成配布、宣伝大会の開催に当たったとあるが、詳細不明。

(39)崑山県の鉄路愛護村は 23 か村 2481 人、自動車道路保持を任務とする公路愛護村は 16 か村 501 人であった（『報告書』33 頁）。

(40)「流動劇団」に関しては、下に挙げた様に『新崑山日報』民国 30 年 5 月 24 日第 2 面に以下に示す記事がある。清郷工作開始に伴って「流動劇団」が解散された理由は、定かではない。

(41)『報告書』28～29 頁。

(42)『報告書』41 頁。

(43)拙稿「維新政府の対日交流 — 中小学教員訪日視察団の見たもの」（拙編『対日協力政権とその周辺 — 自主・協力・抵抗』愛大国研叢書第 4 期第 1 冊、あるむ、2017 年 3 月、pp.209～238）。

(44)『報告書』61～63 頁の久保田の調査による。引用の文言自体は 63 頁。

(45)初等教育の復旧状況は、小学校各種合計 42 校、129 学級、7060 人、教員 167 人であった。事変前は学校数 145，児童数 14 899 人であり、中等教育は 1940 年に県立中学が開設され、生徒数 59、教職員 11 人であるものの、師範学校は復旧せず、省立農学校は未整備という状態であった、（『報告書』62～63 頁）。以下に、久保田が転記した就学児童統計表（『報告書』63～64 頁）を附す。上記以外に私塾 8 か所、児童数 161 人が記録されている。久保田は、県政府の漢語資料を其の儘転記したと考えられ、小学生を「学生」としているが、私塾に関しては「児童」とするなど、記述に一貫性はない。本稿では、現行の日本の教育制度に基づいて表記した。

崑山県就学児童統計表（1945）

区別	人口総数	学齢児童総数	就学児童数
1	32,654	10,516	2,562
2	26,400	7,338	459
3	30,237	8,906	791
4	26,166	7,536	736
5	17,693	5,446	320
6	45,623	12,439	1,343
7	21,963	6,105	482
8	42,063	12,859	367
計	243,799	71,145	7,060

(46)『報告書』64～65 頁。

(47)同前。

(48)『報告書』67 頁。

(49)前掲『維新政府之現況』351～352 頁。学生定員総数 240 人、今後も増員予定、1939 年 1 月段階での学生数は学習期間 6 か月の本科は男子 60 人、女子 43 人、同 3 か月の特科男子 115 人、女子 16 人であった。

(50)『報告書』66 頁。なお、前掲『維新教育概要』13～18 頁には「新教科書ノ編纂」の項目があり、軍特務部教科書審査者名表に主任将校工兵中佐菅野謙吾の名に続き、上掲の同文書院関係者である斉藤重

保、同文書院教授福田勝藏、同文書院卒で上海自然科学研究所主事上野太忠、さらに大東文化学院卒で当時軍特務部総務課員の菊沖徳平、さらに東京音楽学校卒、弘前の藤小学校などで教鞭を執り、当時上海日本女学校講師であった成田蔵巳らがいた。菅野に関しては「満洲国軍事顧問並軍事教官一覧表外の件」（防衛省防衛研究所蔵『陸軍省-陸満密大日記-S9-10-39』JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C01003015400）、成田に関しては安田寛・北原かな子「明治四十年前後津軽地方における洋楽受容に関する考察」（『弘前大学教育学部紀要』第 85 号、2001 年 3 月、91～98 頁）参照。なお、成田は東京音楽学校卒業の教員であったこともあり、当時の中国人女性歌手姚莉が歌う「宣撫工作」を目的とした歌曲を作詞作曲し、日本ビクターが現地法人の「勝利唱片」から出している。下に示すのは、筆者が本稿執筆中、偶然にオークションサイト https://aucfree.com/items/256713113 で見付けたそのレコードの写真である。

(51)草森紳一『文字の大陸　汚穢の都—明治人清国見聞録』大修館書店、2010 年 4 月。尾崎行雄・原敬・岡千仞・榎本武揚・伊藤博文の 5 人の日本人がほぼ初めての中国体験を通して、理念化され美化された伝統中国と、現実社会とのギャップを描いている。これは、日清戦争を最初の海外体験とした圧倒的多数の日本人も、同様の認識を持つに至ったと容易に考えられる。こうした理念と現実との乖離をどのように統一的に理解し、整理するかが書院生に突きつけられた課題であったはずである。

(52)『報告書』78 頁。

(53)同前。

(54)本文中に示したのは『新崑山日報』民国 28 年 2 月 10 日、2～3 面にわたるノドの部分の広告。掲載されていたのは、この日だけではない。紙面を開くと一番目に付くところとなる。上記の広中一成『梶野』について述べた様に、効果的な宣撫工作の手段であり、宣伝紙でもあった対日協力政権治下の親日的華字紙には、当然積極的にこれを掲載していった。

(55)『報告書』78～80 頁。

(56)『報告書』82 頁。

(57)対日協力政権下でのキリスト者の活動については、松谷曄介『日本の中国占領統治と宗教政策—日中キリスト者の協力と抵抗』明石書店、2020 年 1 月参照。

(58)石田卓生「東亜同文書院とキリスト教--キリスト教信者坂本義孝の書院精神」（愛知大学現代中国学会編『中国 21』Vol. 28、2007 年 12 月、193～213 頁）。

(59)『報告書』93～100 頁。

(60)「陽城湖」は「陽澄湖」の誤記か。陽澄湖のワタリガニは昔から秋の味覚として有名であり、近隣の技術の導入、ということであろうか。

【附記】

本稿執筆に当たって、夏井春喜『中華民国期江南地主制研究』（汲古書院、2014 年 2 月）を全体的に参照した。史料に即した精密な研究であり、本稿で扱った崑山地区もその一部として言及されている。今後も、重要な先行研究として折りに触れて活用すべきものとして特筆したい。